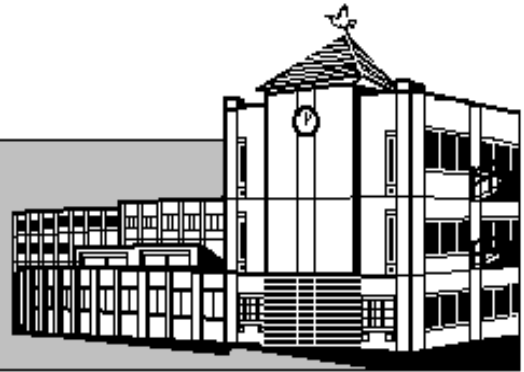


# 図書館だより



2000年度第1号 (2000年4月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

## 私の図書館体験

金山 愛子

日本で大学院時代を送った夫とアメリカの大学院で学んだ私の大きな違いの一つに蔵書数があると思う。クロネコヤマトの引っ越しらくらくパックのアルバイトの人が溜め息をつき、そして2回目の引っ越しからは、「お宅はらくらくパックは無理ですね」と敬遠されてしまった程の本が我が家にはある。そのほとんどが夫の蔵書である。この差は日本とアメリカの図書館事情の違いに因るものであろうと推測している。アメリカでの5年間の留学生活をとおして見聞した私の図書館体験を記してみたいと思う。

私は5年間で3つの大学に籍を置いたのだが、最初の2年間をマサチューセッツ州のアマースト大学で過ごした。この大学の図書館はアマーストで教鞭を取り、この地に所縁の深い詩人口パート・フロストに因んで、ロパート・フロスト・ライブラリーという名前がついていた。アメリカの大学はキャンパスに学生寮が点在しているので、図書館もバイトの学生を置いて深夜まで開いていた。そこへ毎日通った訳だが、図書館に入って正面の壁に老人の肖像画がかかっており、常々「このおじいちゃん誰だろうな?」と思っていた。一年目も終る頃、ようやくひらめいて、友人に「あの肖像画のおじいちゃんロパート・フロストだったのね!」と感動をもって伝えたら、今頃気付いたかと言わんばかりに、「アイちゃんらしいね」と言われてしまった。このように外国では建物に縁の深い人々の名前を冠することがよくあり、敬和のニューエル館、パーム館も同様である。この大学の図書館のシステムで良かったのは、授業の参考図書で、学生に必ず読ませたいと思うものは、教授がそれを図書館に指定して、本や必要な章のコピーを何部か特別の窓口におかせ、貸し出し時間は通常より短くする代わりに、週末でもその窓口を開けて対応していた。

さらにアマースト大学では、近隣の4大学 ハンプシャー大学、エミリー・ディッキンソンが学んだマウントホリヨーク大学、アメリカで最初に設立された女子大スミス大学、マサチューセッツ州立大学アマースト校 と、単位互換制度を設けており、他大学の授業を履修できるだけでなく図書館も自由に使うことができた。さらにすばらしいことにこの別々の街に点在する5大学を循環する無料バスがあり、そのバスに飛び乗れば、いつでも行きたいキャンパスに行くことができた。当時日本で研究していた兄から頼まれた文献を探しにこのシステムをフルに活用した。アマースト大学だけでも当時60万冊あまりの蔵書数を有していたのだから、それを単純に5倍しても300万冊の資料にアクセスすることができた。マサチューセッツ州立大学の図書館は高いタワーになっていたが、「あそこの図書館は傾いているから、あまり長い時間居ない方がいいよ」などと冗談とも本気ともとれないアドバイスを受けた。またスミス大学では、暗い書庫から出た途端に窓越しに雨上がりの庭の緑が目飛び込んできて、あらためてその図書館の美しさに感動した。このような図書館めぐりをするうちに、長かった兄の文献リストが短くなっていくことに心地よい達成感を覚えたものだ。

アマースト大学在学中にオックスフォードのサマーセミナーに参加する機会があった。オックスフォード

大学の図書館を利用するため、前号で若月先生が「ものはためしに、国立国会図書館へ」で書かれたように、図書館長から紹介状をもらってくるようにとの指示があった。司書の人をお願いすると快く引き受けて下さり、「成績優秀(She is of good standing.)と書いておいたからね」と言って渡してくれた。この紹介状をもとにして作られた身分証明証のおかげで、オックスフォードの心臓部とも言われるボードリアン・ライブラリーを訪れ、鎖に繋がれて展示してある古い写本を見たり、『薔薇の名前』に出てくるような歴史ある図書館の雰囲気を経験できたのは幸이었다。

ペンシルヴァニア大学を経て、フィラデルフィア郊外にあるプリンマー大学へ進んだが、その大学には複数の図書館があった。その一つにトーマス・ライブラリーがあったが、その頃すでにほとんどが先生方の研究室となり、一部に考古学関係の図書室があるだけだった。古い石造りのその建物の回廊の内側には芝生の中庭があり、その中心に噴水があった。『旅情』や『冬のライオン』で有名なキャサリン・ヘップバーンが、卒論を提出して卒業が決まった時、鐘を鳴らして塔から駆け降りてきて、その噴水に飛び込んだという言い伝えがある。今でも卒論を提出すると鐘を鳴らすという伝統は続いており、提出日には一日中カランカランと鐘が鳴っていた。たまに噴水に飛び込む物好きな学生は今でもいるらしいが、プリンマー大学の中心的な図書館はキャナディ・ライブラリーだったが、専攻によって図書館内に部屋が設けられ、棚にはゼミで使う参考文献が揃えてあり、大学院生用にキャレルと呼ばれる個人用の机が提供されていて、大変便利だった。

大学図書館の他にも市立図書館を訪れる機会があった。ボストンの大きな石造りの図書館は中を歩いているだけで荘厳な気持ちになる所だったが、その中庭は緑が豊かでベンチが設えられており、ベンチに座って読書する人の姿がちらほらと見えた。そのような光景を目のあたりにして、何と物質的にも精神的にも豊かな国だろうと思ったものだ。

このように恵まれた図書館が多く、近隣の大学まで足を運べば、大概の文献は探せば見つかるものだ。そこで「研究に必要な文献、雑誌は図書館にあるもの」という前提で過ごしてきたものだから、私の蔵書数は帰国当時非常に少なかった。しかしその後、資料を集めることに多くの時間とエネルギーを費やすという経験をして、最近では古本屋から届く在庫目録に目を光らせているのだが、インターネットの普及でこのような図書館事情も変わってくると思う。

私のアメリカでの図書館体験を綴ってきたが、図書館の主役は何と言っても本であり、書棚からそれを取り取る人である。本との出会いは昔住んでいた街や旅先で訪れた街の、何気なく足を踏み入れた路地との出会いに似ている。時が経つとその路地を見つけることが難しくなるものだ。情報過多のこの時代にこそ一冊の本との出会いを大切にしてほしいと思う。書名、著者名、出版社名、出版年と短い感想や抜き書きを書いた読書ノートは、おそらく読者自身の成長の記録となると共に、時が経って読み返してみたくなった本への道案内となってくれるだろう。

## 新着図書

### 総記

原田勝他編『電子図書館』

アルベルト・アングェル『読書の歴史』

山室信一他校注『明六雑誌上』

### 哲学

熊田陽一郎他訳『キリスト教神秘主義』

藺田坦訳『アウローラ』

山田準他訳註『佐藤一斎言志四録』

エルベール編『ガンディー聖書』

長谷川宏『ヘーゲル『精神現象学』入門』

カール・マルクス『哲学の貧困』

トム・ロックモア『ハイデガー哲学とナチズム』

エルンスト・ブロッホ『希望の原理第1・2・3巻』

海保博之他編『認知研究の技法』

杉山憲司他編『性格研究の技法』

P・ブランダムール校訂『ノストラダムス予言集』

ネル・ノディングズ『ケアリング倫理と道徳の教育』

松本滋『父性的宗教・母性的宗教』

A・プランティンガ『神と自由と悪と』

M・ニルソン『ギリシア宗教史』

ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史』

赤阪俊一『神に問う - 中世における秩序・正義・神判』

藤敏夫『近代キリスト教思想史』  
バルバローデル・コル訳『旧約新約聖書』  
『訓点旧約聖書上・中・下』  
Howell, W.S.  
*The History of Logic and Rhetoric in Britain 1500-1700*  
*The History of Logic and Rhetoric in Britain 1500-1800*  
McGrath, A. E.  
*An Introduction to Christianity*  
*An Introduction to the History of Christian*  
Turnbull, Stephen. ed.  
*Japan's Hidden Christians 2 Vols.*

## 歴史

樺山紘一『世界を俯瞰する眼』  
ジャック・ルゴフ『歴史・文化・表象』  
桜井哲夫『戦争の世紀』  
大津透『古代の天皇制』  
峯岸賢太郎『皇軍慰安所とおんなたち』  
戸井昌造『戦争案内』  
李成市『東アジア文化圏の形成』  
高村雅彦『中国の都市空間を読む』  
和田博文他『言語都市・上海 1840 - 1945』  
堀切直人『ヨーロッパ精神史序説』  
金子晴勇『ヨーロッパの思想文化』  
ジャック・ブルースト『16 - 18世紀のヨーロッパ像』  
石井米雄他『東南アジア史 大陸部』  
芝健介『ヒトラーのニュルンベルク』  
高橋進『歴史としてのドイツ統一』  
E.H.カー『ロシア革命』  
鈴木範久『「代表的日本人」を読む』  
由井正臣他『亡国への抗論』  
松村赳他編『英米史辞典』  
Olson, J.S. ed. *Historical Dictionary of the*

## 1960s

## 社会科学

高崎経済附属産業研究所編  
『「現代アジア」のダイナミズムと日本』  
青木保他編『近代日本文化論 3・6・8』  
日本政治学会編『20世紀の政治学』  
J.K.ガルブレイス『20世紀を創った人たち』  
奥平康弘『「表現の自由」を求めて』  
浜林正夫『人権の思想史』  
土屋英雄編『中国の人権と法』  
マーチン・ルーサー・キング『黒人の進む道』  
ポール・ジョンソン『ユダヤ人の歴史上・下』  
三木健『ドキュメント・沖縄返還交渉』  
歴史学研究会編『歴史学の現在 2』  
松井茂記『アメリカ憲法入門第4版』  
道垣内弘人『民法解釈ゼミナール 5』

高橋朋子『近代家族団体論の形成と展開』  
石原善幸『家族法概論』  
アルトゥール・カウフマン『責任原理』  
伊藤眞『破産法全訂第3版』  
菊田幸一『少年法概説 第3版』  
栗林忠男『現代国際法』  
多喜寛『国際私法の基本的課題』  
間宮陽介『市場社会の思想史』  
内橋克人『「技術 - 流国」ニッポンの神話』  
渡辺利夫監修『東アジア長期経済統計 9巻』  
蛭名保彦『環日本海経済圏と環境共生』  
F.ブローデル『物質文明・経済・資本主義 - 2』  
大畠永生『レポートを書くためのパソコン入門』  
折原浩『ヴェーヴァー『経済と社会』の再構成』  
L.フェスティンガー『予言がはずれるとき』  
王少鋒『日・韓・中三国の比較文化論』  
比較文明学会編『比較文明 15』  
蝦名賢造『海軍予備学生』  
小田勝巳『ポートフォリオ学習と評価』  
S.ロスプラット『教養教育の系譜』  
船橋洋一『船橋洋一の世界を読み解く事典』  
銭谷真美『教育法令辞典』  
Beyani, Chaloka. *Human Rights Standards and the Free Movement of People within States*  
Shifman, B. ed. *The Permanent Court of Arbitration*  
Calliess, Christian hrsg.  
*Kommentar zu EU-Vertrag und EG-Vertrag*

## 自然科学

ヨハン・ベックマン『西洋事物起原 3』  
坂東克彦『新潟水俣病の三十年』  
野崎和義他『看護のための法学』

## 技術

伊藤正敏『日本の中世寺院』  
奥野卓司『第三の社会』  
荒畑寒村『谷中村滅亡史』

## 産業

坂本龍彦『集団自決』

## 芸術

大野恵正『聖書と音楽』  
胡昶他『満州 - 国策映画の諸相』

## 言語

エレン・ピアリストク『外国語はなぜなかなか身につかないのか』  
河野哲也『レポート・論文の書き方入門』  
木下是雄『レポートの組み立て方』  
鷺田小彌太他『論文・レポートはどう書くか』  
古郡延治『論文・レポートの文章作法』

ヨアヒム・シルト『図説ドイツ語の歴史』  
『英語年鑑』編集部編『英語年鑑 2000 年版』

## 文 学

内田魯庵『社会百面相上・下』  
長谷川強校注・訳『新編日本古典文学全集 65・80』  
中岡洋他編著『アン・ブロンテ論』  
石一郎『88歳のアメリカ文学』  
武藤脩二『印象と効果』  
板橋好枝編『ヒロインから読むアメリカ文学』  
リデル・ハート『第二次世界大戦上・下』  
河底尚吾『ラテン文学』  
岩波書店編集部編『エッセイの贈り物』5巻  
関口安義『日本児童文化史叢書 25』  
Browning, Robert.  
*The Complete Works of Robert Browning 10*  
Fitzgerald, F. Scott. *Flappers and Philosophers*  
Johnson, Samuel. *Lives of the English Poets 3 Vols.*  
Oates, Joyce, Carol. *Man Crazy*

## 事務局より

新年度になり、キャンパスに新1年生を迎えました。今年度から1年生の必修に「基礎演習」という科目ができました。図書館では、この「基礎演習」単元に『図書館ガイダンス』を行います。これから始まる学生生活に、図書館を有効に利用して頂けるよう願います。2～4年生の学生諸君も、コンピュータでの検索方法や資料の探し方等、わからないことがありましたら、いつでも図書館職員に質問して下さい。

また、4人の専任教員と4人の契約講師の方々が赴任されましたので、教員の方々の表情も心なしか華やいている感じがします。新任の先生方の新しい風を受けて、私たち図書館職員もリフレッシュされた気分です。 (mh)

紀元2000年度の新学期が始まりました。本学も創立10周年という記念すべき年を迎えます。今年度から導入されたセメスター制や1年次生必修の基礎ゼミなど、最先端のカリキュラム改革に見るべき成果を期待しています。

2000年1月の「図書館だより」は、国立国会図書館へのアクセスと利用法を伝授していただいた若月忠信先生と参考文献の書き方を具体的にご教示いただいた神田より子先生からのご寄稿により機能的な内容の館報となりました。

今回の「図書館だより」は、「私の図書館体験」

と題して、ご自分のアメリカ留学時代の図書館活用体験を金山愛子先生から語っていただきました。大学から成績優秀というお墨付きをもらった愛称「アイちゃん」がアマースト大学図書館をメインに、米国のいくつかの大学図書館を精力的にフル活用した様子が彷彿としてきます。留学を希望する本学の学生諸君にも非常に刺激的な文章でありましょう。

際立って個性の強い女優 Katharine Hepburn が卒論を提出して卒業が決まった時、感極まって噴水に飛び込んだというエピソードが文中に出てくるので、*HOLLYWOOD 1930'S*という本を繙いてみると、次のような記述がありました。

She was born in Hartford, Connecticut. Daughter of a doctor, she made her first stage appearance with the Baltimore Theatre immediately after graduating from the college in 1928.

女優としての存在感もあり、これ自体が彼女の演じる映画のひとコマのようです。ヘミングウェイのノーベル文学賞受賞作『老人と海』が映画化され、サンチャゴ老人役として好演したスペンサー・トレイシーとの私生活上の交遊をも含めて、この人はほんとなにをやっても一流、別格といった感じ……

来る5月20日と21日に「良寛170年祭記念大会」が新潟市で開催されるのを知っていますか？

「世界に生きる良寛」を探る国際学会です。座長は『良寛とキリスト』の名著で知られる竹中正夫先生で、本学の宗教部長兼学科長の延原時行先生の恩師にあたる碩学です。「国際シンポジウム」の総司会を延原先生が、米、仏、露、中、日の各国から参加する代表者でシンポは構成されますが、米国のパネリストとして、わが S. Goldstein 先生が参加されます。これは新潟市と全国良寛会、加えて新潟大学と敬和学園大学がタイアップした文化的な一大行事と思います。これを契機に、基督と越後の生んだ良寛禅師を敬慕するとともに、学内や地域の方々からも要望の強い良寛関連図書を、英、仏、伊、中、泰の国々で出版された洋書も含めて、いくらか包括的に集めてみたいと企画しています。

さて、敬和学園大学の図書館を利用する学生諸君は、研究に必要な図書や自分で読んでみたい書物・雑誌があったら遠慮なく図書館へ希望を寄せて欲しいと思います。図書委員による「選書」を経て、できるだけ諸君の希望を叶えたいと考えています。

(kf)